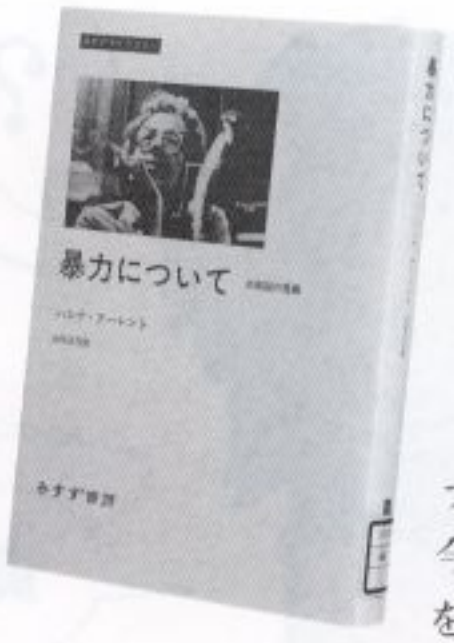
S 『暴力について』

ハンナ・アレント著　山田正行訳
（みすず書房　2002）



「暴力について（Reflexions on Violence）」（『暴力について』みすず書房）の名で知られているハンナ・アレントの論文は、韓国では「暴力の世紀」という表題で読まれている。〈暴力の世紀〉とは、ユダヤ系ドイツ人であるアレントが生き抜いた20世紀のことであり、前世紀が「戦争と革命の世紀」であったことを示している。

アレントは「権力は銃身から生じる（毛沢東）」とか「究極的な権力は暴力である（ライト・ミルズ）」といった権力観を極力否定し、「権力と暴力は対立する」と述べる（このテーゼに関しては、彼女が崇拝していたともいわれるベンヤミンの「暴力批判論」における「神話的暴力」と響きあう点があるとおもわれる）。本書によれば、権力は「数や意見に依拠するもの」であるのに対して、暴力は「その本性からいって道具的なもの」であるがゆえに多数による同意などは必要とせず、「追求する目的による導きと正当化をつねに必要とする」のである。

本書が書かれた当時のベトナム戦争から四半世紀がすぎた今日、いわゆる「テロとの戦い」を目的としていた合衆国の「戦争」は、今度はイラクという「悪の枢軸」を打倒するという目的のためにその戦いを続けようとしている。また、ハリウッド産（MGM）の『007/ダイ・アナザー・デイ』において、ジェームズ・ボンドは「不良国家」北朝鮮を相手に戦っている。合衆国は「現実」や「映像」の世界において「平和は銃身から生じる」と世界多数に発言しているが、けっして世界多数の同意までは求めていない。〈暴力の世紀〉ということばは、前世紀に続いて21世紀にも有効であるような気がする。

（大学院文化学研究科　林漢春〈リム ハンチュン〉）

STUDENTS & TEACHERS いち押し BOOKS

T 『少年動物誌』

河合雅雄著（福音館書店　2002.6）

昨年の夏に『森の学校』という映画が封切られた。舞台は1930年代の丹波篠山。病気がちだがいざとなればケンカも強く、そして無類の動物好き、昆虫好きの少年が主人公だ。少年の腕白ぶりや、家族との絆を軸に構成された映画もおもしろかったが、原作の『少年動物誌』を読んで驚いた。少年の自然に対する大胆で繊細な感性がテンポの良い文体で活写されるかと思えば、病床においても自然に向けてアンテナを張り続けることによって心身をかろうじてこの世に繋ぎ止めるかのような深い陰影に満ちた描写が交錯する。身近な自然が子どもの遊び場になりえた時代だ。同時に自然は底知れぬ怖さも秘めている。ガキ大将でありながら病弱でもあった少年には、自然のもつ両方の面がほどよい塩梅で享受できたのだろう。最近はエコだの環境だのが大はやりだが、実体の希薄な「自然」を神棚に祭り上げて、キチョーなものですからホゴしましょうというような風潮には、やや危なっかしいものを感じる。戦前の「子供たちはだれもが、自然を相手に腕白ぶりを発揮し、自然もまた、びっくりするような事件や、そっくり童話に出てくるような経験を、味わわせてくれたもの」だと著者はあとがきに書いているが、地球環境について机上で論じる前に一度この本を読んで、野生の生き物と無心で戯れるような経験を積み重ねてほしいと思う。

少年は後にサル学の世界的な権威になった。

（法学部助教授　田中恒寿）